

[D年] 受難節第4主日(2024年3月10日)**【旧約聖書日課】****サムエル記上 9章27節～10章1節、6～7節**

9²⁷町外れまで下って来ると、サムエルはサウルに言った。「従者に、我々より先に行くよう命じ、あなたはしばらくここにいてください。神の言葉をあなたにお聞かせします。」従者は先に行った。

10¹サムエルは油の壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ、彼に口づけして、言った。「主があなたに油を注ぎ、御自分の嗣業の民の指導者とされたのです。²今日、あなたがわたしのもとを去って行くと、ベニヤミン領のツェルツェにあるラケルの墓の脇で二人の男に出会います。二人はあなたに言うでしょう。『あなたが見つめようとお出かけて行ったろばは見つかりました。父上はろばのことは忘れ、専らあなたたちのことを気遣って、息子のためにどうしたらよいか、とおっしゃっています。』³また、そこから更に進み、タボルの樅の木まで行くと、そこで、ベテルに神を拜ふに上る三人の男に出会います。一人は子山羊三匹を連れ、一人はパン三個を持ち、一人はぶどう酒一袋を持っています。⁴あなたに挨拶し、二個のパンをくれますから、彼らの手から受け取りなさい。⁵それから、ペリシテ人の守備隊がいるギブア・エロヒムに向かいなさい。町に入るとき、琴、太鼓、笛、豎琴を持った人々を先頭にして、聖なる高台から下って来る預言者の一団に出会います。彼らは預言する状態になっています。⁶主の霊があなたに激しく降り、あなたも彼らと共に預言する状態になり、あなたは別人のようになるでしょう。⁷これらのしるしがあなたに降ったら、しようと思うことは何でもしなさい。神があなたと共におられるのです。

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙二 1章15～22節**

15このような確信に支えられて、わたしは、あなたがたがもう一度恵みを受けるようにと、まずあなたがたのところへ行く計画を立てました。¹⁶そして、そちらを経由してマケドニア州に赴き、マケドニア州から再びそちらに戻って、ユダヤへ送り

出してもらおうと考えたのでした。¹⁷このような計画を立てたのは、軽はずみだったでしょうか。それとも、わたしが計画するのは、人間的な考えによることで、わたしにとって「然り、然り」が同時に「否、否」となるのでしょうか。¹⁸神は真実な方です。だから、あなたがたに向けたわたしたちの言葉は、「然り」であると同時に「否」であるというものではありません。¹⁹わたしたち、つまり、わたしとシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方においては「然り」だけが実現したのです。²⁰神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます。²¹わたしたちとあなたがたをキリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いでくださったのは、神です。²²神はまた、わたしたちに証印を押して、保証としてわたしたちの心に“霊”を与えてくださいました。

【福音書日課】 ヨハネによる福音書 12章1～8節

1¹過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。²イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。³そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。⁴弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。⁵「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」⁶彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心に掛けていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていたながら、その中身をごまかしていたからである。⁷イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。⁸貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記上9章27節～10章7節

9²⁷町外れまで下って行くと、サムエルはサウルに言った。「供の若者に命じて先に行かせなさい。あなたはしばらくここにいてください。神の言葉をあなたに聞かせます。」

10¹サムエルは油の小壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ、口づけして言った。「主があなたに油を注ぎ、ご自分の民の指導者とされたのです。²今日、あなたが私のもとを去って後、ベニヤミン領のツェルツァにあるラケルの墓の傍らで二人の男に出会うでしょう。二人はあなたに言います。『あなたを見つけようとして出かけた雌ろばは見つかりました。お父上はろばのことはもう気にせず、あなたがたのことを心配し、息子のためにどうしたらよいかとおっしゃっています。』³また、そこからさらに進み、タボルの櫂の木まで行くと、そこで、ベテルに神を拝みに上る三人の男に会います。一人は子山羊三匹を連れ、一人はパン三個を持ち、一人はぶどう酒の革袋を一つ携えています。⁴彼らはあなたに挨拶し、パン二個をくれますから、彼らの手から受け取りなさい。⁵その後、ペリシテ人の守備隊がいるギブア・エロヒムに向かいなさい。町に入ると、豎琴、タンバリン、笛、琴を持った人々を先頭にして、高き所から下って来る預言者の一団に出会います。彼らは預言する状態になっています。⁶すると、主の霊があなたに激しく降り、彼らと一緒に預言して、あなたは別人のようになります。⁷これらのしるしがあなたの身に起こったら、ふさわしいと思うことは〔直訳→あなたの手が見つかるものは〕何でも行いなさい。神があなたと共におられます。

コリントの信徒への手紙二1章15～22節

¹⁵このような確信をもって、私は、あなたがたがもう一度**恵み**〔異本→喜び〕を受けるようにと、まずあなたがたのところへ行く計画を立てました。¹⁶そして、そちらを経由してマケドニアに赴き、マケドニアから再びそちらに戻って、ユダヤに送り出してもらおうと考えたのでした。¹⁷このよう

計画を立てたのは、軽はずみだったでしょうか。それとも、私の計画は人間的な考えによるもので、私にとって「然り、然り」が同時に「否、否」となるのでしょうか。¹⁸しかし、神は真実な方です。だから、あなたがたに向けた私たちの言葉は、「然り」であると同時に「否」であるというものではありません。¹⁹私たち、つまり、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方においては「然り」だけが実現したのです。²⁰神の約束はすべて、この方において「然り」となったからです。それで、私たちはこの方を通して神に「アーメン」と唱え、栄光を帰するのです。²¹私たちとあなたがたをキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注いでくださったのは、神です。²²神はまた、私たちに証印を押し、**保証**〔直訳→手付金〕として私たちの心に霊を与えてくださいました。

ヨハネによる福音書12章1～8節

¹過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。²イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に席に着いた人々の中にいた。³その時、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足を拭いた。家は香油の香りでいっぱいになった。⁴弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていた〔別訳→引き渡そうとしていた〕イスカリオテのユダが言った。⁵「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」⁶彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。自分が盗人であり、金入れを預かっていて、その中身をごまかしていたからである。⁷イエスは言われた。「この人のするまにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。」⁸貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月10日「受難節第4主日」の日課主題は「香油を注がれた主」。

・旧約聖書日課は、「サムエル記上」から、預言者サムエルがサウルに油を注ぎ、これから指導者になっていくまでに起こることを預言して告げる箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、パウロが自身のコリント訪問計画について事情を告げる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスが油を注がれた逸話の箇所。

旧約日課(サムエル上 9~10 章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書≡旧約聖書)「前の預言者」の第3巻で、「ヨシュア記」から「列王記」までで綴られるカナン定住時代を物語る「イスラエル正史物語」の内、サウルおよびダビデの王国成立期を扱う歴史物語文書。書名となっている「サムエル」は、「シロ神殿」の祭司エリのもとに幼少時に預けられ人物で、エリとその息子らが死んだ後、「先見者」＝「預言者」としてイスラエル諸部族に対して影響力を行使するようになり、サウルおよびダビデの王即位に道筋をつけたとされている。ただし、本書においてダビデとの接点は限られており(上16章)、元来は、もっぱら「サウル王伝承」と結びつけられた人物として伝えられていたものと考えられる。

・「サムエル」は、エフライムの山地ラマタイム・ツォフィム(＝ラマ)を拠点とするエルカナの子で、エフライム族の人として描かれている(上1章)。「ラマタイム・ツォフィム」は、「ツォフィムのラマ(高台)」の意味で、サムエルの居所が「ラマ」であったと描かれるほか(上6:17)、正典中には複数の「ラマ(高台)」と呼ばれる地名が出てくる。サムエルは、「シロ神殿」の祭司で「イスラエルのために裁きを行」(上4:18)ていたエリのもとで育ち、エリとその息子たちが死んだ後、「イスラエルのために裁きを行」(上7:16~17)って祭儀を執り行う働きを継承した人物として描かれる。「裁きを行」うというのは、いわゆる「士師」と呼ばれる者の行為で、「士師記」ではもっぱら軍事指導者として描かれている。「サムエル記」でも、エリの息子たちは、ペリシテ軍とイスラエルの戦争に際して「神の箱」を持ち出して陣営を鼓舞する役割を担ったとされている(上4章)。ただし、サムエルの活動は、「シロ」ではなく、「ラマ」および「ベテル、ギルガル、ミツパ」(上7:16)を拠点として為されたとされているほか、「シロ神殿」に置かれていたという「神の箱」もエリ親子の死後はペリシテ人の手を経て「アビナダブの息子エルアザル」が保管していたとされており(上7:1)、厳密には「神の箱を旗印とするシロ神殿の祭司・士師エリの後継者」とは言えない。おそらく、元来は別系統の宗教指導者として知られたサムエルをエリの後継者と位置づけるために、誕生・召命物語(上1~3章)が加えられているのだろう。

・「サウル」は、ベニヤミン族のキシユの息子として登場する(上9:1)。彼は、父親の所有するろば数頭が姿を消したために捜索に遣わされ、その先で立ち寄った町に「聖なる高台(バーマー)」で犠牲を奉獻するために「神の人」が滞在していることを聞きつけ、「先見者サムエル」を訪ね当てたとされている(上9章)。このサウルに、サムエルは、従者と引き離して一人にしてから油を注ぎ、「民の指導者」すなわち王になることを宣言している。「指導者(ナーギド)」は、もっぱら「イスラエル」の「君主」を指して用いられる語。「油を注ぎ(マーシャハ)」から派生したのが「油注がれた者(マーシュハ>メシア)」という用語。このときは、サウル一人がサムエルと対面したのみであるが、その後、イスラエルの民がサウルを王として立てた場所は、サムエルの拠点の一つである「ギルガル」であったと描かれている(上11章)。「ギルガル」は、かつてヨシュアがカナン侵入に際して最初に宿営して拠点とした地であり(ヨシュア4:19)、王国時代の預言者「エリシャ」を支持した預言者集団の拠点のひとつでもある(王下2章)。サウルは、イスラエル諸部族(の長老)の支持を得ると共に、ギルガルを含む複数の地方聖所を拠点とする宗教的指導者「サムエル」の権威のもとで王位を承認された、ということである。

使徒書日課(Ⅱコリント1章)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書。パウロがローマの教会共同体出身のユダヤ人夫妻アキラとプリスキラらと共同で創設に携わった「コリントの教会共同体」に宛てて記した一連の書簡の中の一つ。聖書学者の多くは、それら一連の書簡の内の複数が一つにまとめられていると仮説するが、分割して解釈されることはない。

・日課箇所を含む1章で、パウロは、この書簡を著すに至るまでの経緯に触れている。それによれば、パウロは、アジア州エフェソでの活動を継続できなくなった後、当初はすぐにアカイア州コリントに向かい、それからマケドニア州を経由してユダヤ・エルサレムを目指すつもりであった。ところが、実際には、エフェソからまずマケドニア州に向かい、その後、「ギリシア」＝アカイア州?に行き、再びマケドニア州を経由して、アジア州の港からユダヤ・エルサレムを目指すこととなった(使徒20章、Ⅰコリ16:5)。本書簡で、パウロは、この一連の行動をコリントの教会共同体(の一部の人?)から非難されたことに弁明をしているのである。おそらく、当初はエフェソからまっすぐコリントに向かうつもりだったというのは、後付けの言い訳なのだろう。コリントの教会共同体では、パウロを指導者として支持するかどうかで意見が割れており、パウロを支持するグループが助言を求めたのに対して「手紙一」が送られたのだが、そのグループも含めてパウロがコリントよりもエフェソやマケドニア州の教会共同体を優先していると思われ、不信が募っていたのかもしれない。

・21 節「キリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いでくださったのは神です」は、原文ギリシア語で「…エイス・クリストス・カイ・クリサス・ヘーマース・テオス」と表されており、「キリスト(クリストス)」が「油を注ぐ(クリオー)」から派生した語であることが明確に示されている。パウロは、「洗礼」をキリストと結びつけられることとして理解しているが(ロマ 6 章など)、それによって、信者もまた一人の「キリスト(=油注がれた者<クリストス)」とされている、と理解している。「油注がれた者」は、旧約の用例「メシア」では神に任じられた指導者一般(王や預言者)に対して用いられており、また 1 世紀当時のユダヤ人社会ではもっぱらユダヤ民族主義的な文脈で軍事的な独立指導者を指して用いられていた。そのような背景からも、初期教会において「キリスト」は、主イエスを唯一無二の救世主として位置づけるための称号として用いられたというよりは、より広義に、「神から使命を託されて遣わされた人」という意味で幅広く理解されていたと考えられる。

福音書日課(ヨハネ 12 章より)

・日課箇所は、各福音書が「受難物語」と結びつけて伝える「主イエスの香油注ぎの逸話」の箇所。マタイとマルコが、この出来事を「ベタニア」の「重い皮膚病の人シモンの家」(マタイ 26:6、マルコ 14:3)としているのに対して、ヨハネは同じ「ベタニア」ではあるが「ラザロ」の家を想定しており、香油を注いだ女が「マリア」であったとも特定している。このような違いにもかかわらず、三つの福音書の伝える逸話の細部展開に相違はない。「ルカ」は、受難物語中にこの逸話を伝えていないが、ガリラヤ伝道中の「ファリサイ派の人」の家での出来事として酷似した逸話を伝えている(ルカ 7:36 以下)。

・この出来事は、三福音書(マタイ、マルコ、ヨハネ)で主イエスの葬りと結びつけられている。主イエスの埋葬記事で「油」の塗布を明確に伝えるのはマルコ(16:1)のみ、ルカ(23:56)は示唆しているのみであるが、「香料(アロマ)」についてはマタイ以外が言及している。「香油(ムーロン)」注ぎが事前の「葬り」として記念されるというのは、実際には埋葬を十全に行えなかったということが反映しているのかもしれない。

来週の誕生日 (3月10日~16日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-22 番「深き悩みより」(= I 258「貴きみかみよ」詞)は、M・ルターが宗教改革運動の初期にドイツ人庶民のための詩編歌として作詞した一つで、詩編 130 編に基づいて作詞、1524 年出版の讃美歌集に加えられた。いくつかの曲で歌われてきたが、ダハシュタインの曲を付したもの。同じ詞に M・ルター自身が古い教会旋法に基づいて作曲したものは 160 番に所収。『讃美歌 21』に採用される際に原詞に基づいて改訳されている。

・21-567 番「ナルドの香油」(= I 391「ナルドの壺」)は、19-20 世紀米国の会衆派牧師パーカーの作詞作曲。パーカーが説教後の讃美歌として自作。20 世紀後半以降の英語讃美歌では採用されていない。
・21-512 番「主よ、献げます」(= I 339 番「君なるイエスよ」)は、19 世紀に女流詩人として知られたハヴァガルの作詞で、ある滞在先で経験した集団回心に感謝する中で作られたとされる。一時は広く歌われていたが、現在では、メソジスト讃美歌集のみで残る。

21-22「深き悩みより」

Aus Tiefer Not Schrei Ich zu Dir

1. Aus tiefer noth schrei' ich zu dir, / Herr Gott! erhör' mein rufen! / Dein gnädig ohr neig her zu mir, / Und meiner bitt' sie öffne: / Denn so du wilt das sehen an, / Was sünd' und unrecht ist gethan, / Wer kann Herr! für dir bleiben?
2. Bei dir gilt nichts denn gnad' und gunst, / Die sünde zu vergeben; / Es ist doch unser thun umsonst, / Auch in dem besten leben: / Für dir niemand sich rühmen kann, / Deß muß dich fürchten jedermann, / Und deiner gnaden leben.
3. Darum auf Gott will hoffen ich, / Auf mein verdienst nicht bauen; / Auf ihn mein herz soll lassen sich, / Und seiner güte trauen, / Die mir zusagt sein werthes wort, / Das ist mein trost und treuer hort, / Deß will ich allzeit harren.
4. Und ob es währ' bis in die nacht / Und wieder an den morgen, / Doch soll mein herz an Gottes macht / Verzweifeln nicht noch sorgen. / So thu' Istrael rechter art, / Der aus dem Geist erzeuget ward, / Und seines Gott's erharre.
5. Ob bei uns ist der sünden viel, / Bei Gott ist vielmehr gnaden, / Sein' hand zu helfen hat kein ziel, / Wie groß auch sei der schaden. / Er ist allein der gute hirt, / Der Israel erlösen wird / Aus seinen sünden allen.

21-567「ナルドの香油」

Master, No Offering

1. Master, no offering, / Costly and sweet, / May we, like Magdalene, / Lay at Thy feet; / Yet may love's incense rise, / Sweeter than sacrifice, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
2. Daily our lives would show / Weakness made strong, / Toilsome and gloomy ways / Brightened with song; / Some deeds of kindness done, / Some souls by patience won, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
3. Some word of hope, for hearts / Burdened with fears, / Some balm of peace, for eyes / Blinded with tears, / Some dews of mercy shed, / Some wayward footstep led, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
4. Thus, in thy service, Lord, / Till eventide / Closes the day of life, / May we abide! / And when earth's labors cease, / Bid us depart in peace, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.

21-512「主よ、献げます」

Take My Life and Let It Be

1. Take my life, o ments and my days; / let them flow in ceaseless praise. / Take my hands, and let them move / at the impulse of thy love. / Take my feet, and let them be / swift and beautiful for thee.
2. Take my voice, and let me sing / always, only, for my King. / Take my lips, and let them be / filled with messages from thee. / Take my silver and my gold; / not a mite would I withhold. / Take my intellect, and use / every power as thou shalt choose.
3. Take my will, and make it thine; / it shall be no longer mine. / Take my heart, it is thine own; / it shall be thy royal throne. / Take my love, my Lord, I pour / at thy feet its treasure-store. / Take myself, and I will be / ever, only, all for thee.